

令和5年度 第3回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：令和6年2月16日（金）18：30～20：30

会 場：練馬区アトリウム地下 多目的会議室

1. 事務局長挨拶

日ごろからご協力いただき感謝申し上げます。最初に能登半島の地震の話ですが、募金活動を1月に2回行い、15万円ほどご寄付いただいた。今月も2回、練馬駅で行う。民生児童委員協議会からも義援金をご寄付いただいた。災害ボランティアセンターが次々に立ち上がっている。東京からも職員の派遣が行われている。練馬区社協からも立候補をしたが今回は見送りとなった。長期的な支援が必要だと思うので派遣要請があれば積極的に立候補したい。いずれにしても地元の皆さまと力を合わせて能登半島の地震については支援をしていきたいと思っている。

今日の会議では骨子案を出させていただいているが、忌憚のないご意見頂きたい。今日を迎えるにあたって、委員の皆さまも各グループに分かれて打ち合わせに参加していただいて資料にエッセンスが詰まっている。委員の皆さんに活発な議論をよろしく願う。

2. 配布資料確認

練馬区地域福祉計画進捗状況報告

＜委員長＞：今年は何年明けから大きな災害があり大変な年明けとなってしまった。今は携帯で動画が撮れて、色々な映像があふれているが、逆に被災された方の気持ちが見えづらくなってしまっているように感じている。今日は第6次地域福祉活動計画について話し合うので、先のことを想像しながら会議に参加していただきたい。

＜職員＞：前回の評価委員会で次期計画の策定について報告させていただいた。区の計画の推進委員会が3月下旬となっている。その委員会で10月に実施した調査の結果を受けて現状と課題について報告し委員から意見をいただく予定。区の地域福祉計画の今後の予定は3月に推進委員会、来年度は8月中くらいまでに推進委員会を4回開催する。時期計画の策定に向けた意見のまとめを作成する。その後、素案を作成し、12月にパブリックコメント実施後の案を作成するというスケジュールとなっている。

3. 第5次地域活動福祉活動計画の取り組み状況について

資料1～2で取り組み状況を報告。

【資料1-1、2：第5次地域福祉活動計画取り組み報告書（光が丘地区・練馬地区懇談会）参照】

＜職員＞

光が丘地区について

昨年12月4日に「街かどケアカフェはるのひ」にて開催した。

参加者はネリーズが10名、策定委委員と職員をすべてあわせて17名が参加。

当日は、開催場所であった地域包括支援センターの説明や、街かどケアカフェ、同じ建物にある児童館の取り組みなどを説明して頂き、ネリーズの方々と地域の社会資源を見学した。

参加者からは、地域の社会資源を1つでも知っておくことは良いことであるという話や、高齢者は「教育」と「教養」が重要であるとの話もあり、今日行くところがあることと、今日用事があることが大切だと話されていた。また、「実際に現場に来て色々なことを直接聞くことや知ることが出来た今回の機会こそが、地域活動の一步となった」と、話をされていた。

成果として、光が丘地区の開催だったので、光が丘・田柄・北町から参加の方が多く、懇談会に参加した

同じ地域に住む方と知り合いになれて良かったという話や、自分が住む自治会でも街かどケアカフェを開きたいと思っている方などもいた。一方で、ネリーズ同士がより交流し懇談出来る場面を作れるように、今後工夫や継続実施など、検討していければよいと振り返りも行った。

練馬地区について

1月12日に豊玉はつらつセンターで実施した。はつらつセンターを利用されている方向けにも参加募集をしたので、ネリーズが2名、はつらつセンター利用者が5名、委員と職員合わせ、15名参加した。当日は、はつらつセンターの概要を報告頂き、ネリーズについてのお話を改めてした後に、参加者でネリーズかるた大会をした。

札についてのエピソードを伝えながら始まり、途中からは本気のかるた大会で楽しんだ。

はつらつセンターの登録者たちは、ネリーズかるたを知らなかったのも、同じ文字の札の多さに戸惑いも見せていたが、エピソードを聞きながらこの札かあの札かと盛り上がった。

参加者からの意見は、「かるたには『あいさつ』『お互いさま』『たすけあい』など何度も出てくる言葉があり、かるたを作った地域の皆さんが大切にしている言葉なんだろうと感じた」という意見や、今日参加できたことが「気楽な気持ちで会いに行こう 今日みんなが待っている」という札が、まさにその心境だったと感想を述べられ、「思い切って家を出て参加して良かった」と話していた。

足腰が悪いと最初はイスに座ってかるたをしていた方が、社協のYouTubeにもアップされているが、途中から総立ちでかるたを楽しみ、地域福祉やネリーズのことを知ってもらえたのではないかと思う。

今回はネリーズの参加が予定より少なくなってしまったが、豊玉はつらつセンターと合同で出来たことで、新たにネリーズの理解や登録に繋がった。はつらつセンターでは「懇談会」とタイトルに付けると参加者のハードルが上がり、参加者が少なくなると話をされていた。まずはネリーズを集客し地域の方々同士が繋がれるような機会を作っていけたら良い、そのための工夫も必要だと振り返った。

全体をとおして「ネリーズだけ私は何もしていない」という意見も各地域で聞かれたので、改めてネリーズに向けてネリーズのことをわかりやすく伝えていく必要があることと、参加して地域の社会資源を一つ知ることにもまさに地域活動の一つだということなど共有していけたら良いと思う。

<委員>:光が丘地区は新しい施設で行った。見学することで知らない人も利用の仕方がわかったと思う。

<副委員長>:報告書の参加者の意見や声のところで誰でも参加できるケアカフェもどきのようなところがあると良いと書いてあるがどういうことか。

<職員>:意見をくださった方の地域ではサロンのような居場所がないのでほしいという意味であった。

<委員長>:ボランティアセンターでもいいのですよと言えると良い。

<委員>:私は高齢だが、ネリーズかるたが始まってしまうと年齢を忘れて夢中になり楽しかった。

<委員>:とても楽しかった。このかるたは言葉を味わえるので体験できてよかった。

【資料2: 第5次地域福祉活動計画の後半評価と6次計画に向けて 参照】

<職員>:「令和4年度の各柱の取り組み」、「講座・シンポジウムの分析」、「策定委員のご意見」等をもとに活動後半の評価としてこの資料をまとめた。2年前の中間評価では、新型コロナウイルス感染拡大が日常生活の制約や自粛、生活様式の変化などに大きな影響を与え、地域活動推進も大きく変化していくことになった。第5次計画の策定時にはとらえきれなかった変化があり、その変化を踏まえて後半の取り組みを提案した。

「戦略チームの取り組み」では、地域福祉推進の原動力となる「気づきの共有と広がりによる育ちあい」を意識して発信力を高めるための工夫、「柱1つながりのある地域をつくる」では、住民とともに分野を超えたネットワークをさらに進め、ネットワークを通じた課題解決のしくみづくりを推進していくこと、

「柱2それぞれの生き方を支える」では、個別性と多様性を尊重した権利擁護の視点を基盤とし生活課題の解決に取り組んだ事例を整理することとした。

下表が後半に取り組んだ「内容」「中間評価で提案した内容」「後半評価と6次計画に向けて」の考察になる。評価項目は「戦略チームの取り組み」「柱1」「柱2」「新型コロナウイルス感染症の影響がもたらした地域課題」とした。

「ネリーズ通信」は、民生児童委員協議会に通信を配布しネリーズの活動と思いを伝えネリーズの周知を図った。

「ネリーズ懇談会」は、後半はオンライン形式から対面形式に移行し、地区別に地域活動団体に赴き懇談会を再開した。一つの例で、学校に行かない選択をしたこどもたちの居場所づくりをしているなど地域団体の活動を通して、様々な価値観を持った住民同士が会おう場になり、多様性を知る機会になっている。

「ホームページ」もYouTubeの運用を開始しリニューアルした。

「キーパーソン」チームでは、事例を通して「地域福祉コーディネーター」「ネリーズ」「キーパーソン」の三つの機能を4コマ漫画として作成し、見える化することで気づきを深めた。

中間評価提案「発信力を高める」「住民にわかりやすく伝える」工夫について各チームが意欲的に取り組んだ。

戦略チームの「取り組みの後半評価と6次計画に向けて」では、コロナ禍で地域活動が停滞した後、ネリーズが孤立感を感じるがあったとの声を踏まえ、ネリーズが孤立感を抱かず、地域をより良くしたいというネリーズ同士のつながりを作る仕組みや社会福祉法人等ネットなどと連携したネリーズの力が発揮した取り組みができると良いと考えた。

また、第5次計画では「ネリーズ」「地域福祉コーディネーター」に「キーパーソン」の概念が入り、事例やマンガで視覚化し機能を分析、意識化する作業をしてきた。その作業を通して、ネリーズ・キーパーソンは単体で役割を果たすのではなく、重なり合い包含するように機能し、同じ方向で動いていることに気づいた。

第6次計画では、住民とともにネリーズの思いや考えを共有しマインドを広げるために、事例を重ね見える化し、地域福祉推進の機運を高めていく必要があると分析した。

「柱1」では、コロナ禍から「発達性読み書き障害を持つ親からの相談から始まった地域の課題を共有し発信し地域づくりを進めている。

社会福祉法人等のネットワークでは「就労体験」「居場所づくり」「福祉教育」を柱にした取り組み、こどもや障害者、貧困、触法、孤立など様々な課題や生きづらさを抱える人に対して、分野を超えたネットワークを活用し新たなつながりが生まれる基盤づくりが進んだ。

「柱2」まるごと認め支えあう仕組みの構築では、生活に困窮する人や複合的な課題を抱える人、ひきこもりへの支援に取り組んだ。

また、権利擁護の視点をもった地域生活支援の推進では、障害等のある当事者が講師等になり、ともに支え学び合う関係を作ってきた。

第6次計画では、ひきこもり、生活困窮、触法予防、再犯防止等さまざまな地域課題に対して、一人ひとりの生き方を支えるため、社会福祉法人等ネットの取り組みなどで地域課題を共有し支援につながる、さらなる分野を超えたネットワークの力が必要と考えた。第6次計画では、協働して取り組みを推進していきたいと考えた。

「新型コロナウイルス感染症の影響がもたらした地域課題」では、これまで経験したことのない漠然とした恐怖や不安、ストレスに社会全体が遭遇し高齢者や生きづらさを抱えている人たちの孤立感を一層深めた。外国籍の人の生活課題や離職等による生活困窮の問題など様々な複合的な課題が顕在化し、社会制度の枠組みそのものが脆弱な中で福祉等支援を必要とする人への対応を行った。

コロナ禍で人との距離、地域との関わりが以前とは変化している。コロナ以前には、精神科医療の病院や

障害施設が地域の子どもたちや住民と交流できる環境を築いてきた。コロナ禍のこの数年で祭りやイベントがなくなるなど、地域との関係も寸断された。ゼロないしマイナスになってしまった地域との関係性の回復への取り組みと、コロナ禍だったからこそ新たな関わりが生まれた人たちとの関係性を築いていく必要がある。また、コロナ禍で顕在化した課題が、コロナの終息に伴い見えにくくなっている状況である。制度の狭間にいる人たちに、地域も巻き込みながら支援の仕組みを検討し続けていく必要がある。第6次計画策定にむけて、今年度当初から骨子チームを設けて、これまでの課題と成果を振り返りながら骨子案の作成や内容の検討をしている。

この間、策定・推進評価委員会でのグループディスカッションに加え、策定・推進評価委員と社協職員のグループインタビューとディスカッション、地域活動団体へのインタビュー、第6次計画に関わる社協職員の意見交換・課題を共有し、第6次地域福祉活動計画骨子（案）を考えた。

4. 第6次地域福祉活動計画策定に向けて（職員）

【資料3： 第6次地域福祉活動計画 骨子参照】

第6次地域福祉活動計画の骨子案について説明する。

資料3-1が第6次計画の骨子案、資料3-2が計画の体系図となっている。

まず、今回の計画を作成するにあたって、より分かりやすくすることを意識した。内容に入る前に構成の変更点から説明する。構成の変更点は大きく分けて3つある。資料3-2にあるように1つめは計画の柱を第5次計画では二つだったものを三つの柱とした。

二つ目は資料3-1で取り組み項目の番号を全体の通し番号とした。そのため、取り組み項目の柱1は1から3、柱2が4からとなっている。

最後に三つ目としてなるべくわかりやすく計画全体を表すために、第5次計画では計画推進の「視点」が入り、「取り組み項目」の下に「取り組み内容」という構成だったが、それらをあえて載せず、全体の構成を簡潔にする方向で考えた。

まず始めに資料3-1の骨子案について説明する。これから説明する内容や項目などは現時点のものとなっているので、今後の検討の中では変更がありうることをご了承いただきたい。

資料3-1の全体の構成として、第1章から裏面の第5章までの章立てとその内容や要素となっている。

第1章はじめにとして、あいさつ、作成の経緯や社会福祉協議会の活動計画など一般的な内容。第2章は練馬区社会福祉協議会を取り巻く社会状況としまして、先ほどの評価を受けて、第5次計画を推進する上では大きな影響を受けたコロナ禍から見えた地域課題等や今後本格的に取り組んでいくことになる重層的支援体制整備事業、再犯防止推進計画など地域福祉計画との連携などの説明となっている。

第3章では、第5次計画の振り返りとして、先ほどの評価などを計画に落とし込む。評価を受けて第6次計画に大きく影響があるのはここに記載の3点と考えた。

まず、コロナ禍での活動計画推進の状況について説明する。社会に与えた影響が大きい中、コロナ禍の計画推進への影響を取り上げた。練馬区社協でもコロナ禍に貸付が大変多かったことや、コロナ以前ではあまり顕在化してこなかった外国籍の人への支援の課題や生活困窮など複合的な課題の発見につながった。また一方でコロナでもオンラインを活用するなど工夫をしてきた。

二つ目がネリーズとキーパーソンについて。キーパーソンについて振り返りを行っている。第5次計画を推進し、第6次計画を検討する中で、キーパーソンは単体で役割や機能をもつというよりもネリーズに包含されていると考えた。様々なネリーズがいる中で、その中にキーパーソンもおり、個人だけではなく地域活動している団体や法人でもネリーズといえるのではないかと考えた。そのため、第6次計画にはキーパーソンについてはあえて大きくは取り上げていない。

三つ目がねりま社会福祉法人等のネットの取り組み。これは第4次計画から始まったものであり、第5次計画で推進している。第6次計画ではさらに強調していければと考えた。これらの第3章の振り返りを踏

また第4章が第6次計画の推進する方向性を示している。

第4章は計画の評価に加えて策定委員会や職員のディスカッション、地域活動団体へのインタビューをもとに計画推進の方向性を示した。

まず、第6次計画では計画全体にかかる重点的な取り組みとして、ネリーズ、社会福祉法人等のネット、地域福祉コーディネーターが協働した地域づくりを掲げている。この3者はそれぞれ個別に計画の取り組み項目に入れるというよりも、多くの項目に関連していることなどから、計画全体に密にかかわるのであえて取り出して協調している。

社会福祉法人等のネットについて、これまで策定委員会ではあまり明確に取り上げてこなかったもので、今回ご説明する。別紙参考資料の「ねりま社会福祉法人等のネット」の取り組みについてご覧いただきたい。

【参考資料】説明

社会福祉法人等のネットの取り組みやネリーズの取り組み、そしてそれらをつなげたり発見したりする役割として社協の地域福祉コーディネーターがおり、これらの取り組みを第6次計画の推進においては重点的な取り組みとして考えている。

第5次計画では2つの柱をかかげていたが、新たな計画では3つの柱とした。

一つ目が一人ひとりの生き方を認め支えあう（尊厳の確保）

二つ目がつながり支えあう地域をつくる（地域づくり）

そして新しく三つ目がそれぞれの居場所と活躍の機会をつくり支えあう（参加・活躍）とした。

資料3-1の4章の説明。

そしてただ今説明した内容を体系図としたものが資料3-2となっている。以上が第6次計画策定に向けて、これまで検討を重ねてきた骨子の案となっている。

<委員長>：これからの大事な柱になっていくので活発な意見をいただきたい。作成にあたってインタビューをさせていただいた委員の団体の希望というか活動の内容が計画に反映されているか意見いただきたい。

<委員>：5次計画において、キーパーソンチームに入りキーパーソンや地域福祉コーディネーターの機能について話し合った。職員と関わることでどういう気持ちで全体の事業に役割を持ってやっているのかが知れたことがよかった。その中で、6次計画に活かしていきたいことが、計画の柱3になる。私の活動は不登校や子どもの貧困を対象にしている。その人たちがいるから問題意識をもって活動している。私たちが関わっている人が参加できるビジョンを反映していきたい。私の団体でいうと小中高どこにも所属していない青年がいるので、その人たちが地域での役割を見つけられるよう、次につながっていくような具体的な活動を意識していくことが大切。

<委員>：地域社会につながれない人たちが当団体には多いのでどのようにつながっていけるかがその人の人生において大きい。地域の中で声のあげられない人たちと私たちがつながれることを希望している。複合的な課題の根本的な問題になっている、核家族との交流というのも計画の中でできたらいいなと感じている。

<職員>：委員の言っている、つながるという視点が必要。委員がおっしゃっている柱3の参加する、活躍するについて二つあっていいのかななどご意見をいただきたい。委員のお話だと参加するがまずあって、活躍するのはそのあとの生き方なのかなと感じた。もっとこういう視点が必要じゃないのというご意見あればお願いしたい。

<委員長>：活躍するというとプレッシャーを感じる方もいるかとは思いますが、どういう言葉をチョイスするかも含めてご意見をいただきたい。

<副委員長>：先日、事務局との打ち合わせがあった際に、委員からリアリティを感じない計画じゃないかのご意見があった。なぜかという、第5次計画の半ばに起きたコロナの問題が大きかった。コロナの経験はどういうことだったのか、その中で何を学んで何をしないといけないのかというのをもっと明確に反映していかなくてはならないのではないかと。委員の団体のようにみんな閉めていた中で一回も閉めずに子ども食堂を開催していた。そのあたりを計画に反映させてはどうか。委員の団体もステイホームと言われる中で家族関係が悪化し、DVがひどくなっていった話も聞き、身近な問題と感じて活動していたと思う。そのあたりを話してもらえると、この計画もリアリティのあるものになっていくので話していただければありがたい。

<委員>：例えばネリーズ懇談会の参加者の意見や声、実施後の考察にヒントがある。計画や体系を考えることに事務局も苦労したと思うが、社協の多くのメニューを計画に落とし込まなくていい。新型コロナの感染症は社会福祉協議会のように協議して話し合うところに、ものすごいインパクトだった。多くの人は外出をしてはならない、話をしてはならない、子ども達も学校に通うことすらできない、そういう時間を余儀なくされた。でも、福祉サービスを利用している人々にとって支援や通う場は生きていることとイコールのはず。社協と関わってこなかった多くの方たちが貸し付けなどを利用した。社協と関わっていない支援が必要で孤独な状況に陥り生活を送られていた人がいた。この状態を経て、第5次計画と同じような体系で大丈夫ですか。という懸念がある。コロナに関しては、感染症の法律で2類から5類になっても完全に収束したわけではない。多くの弱い立場に置かれてしまう方たちが、感染症の時に厳しい状態に置かれることを目の当たりにした。社会福祉法人にどんなことを期待できるかというテーマで学生に課題を出すと、多くの学生が、社会福祉法人こそ孤立・孤独を抱えている人と社会のつながりをもう一度作れるのではないかと、自分たちもそういうところならば就職をしたいと考える学生もいる。すべての問題を社協が解決するという話ではないが、社協がやれることを考え直す、住民との様々な関わりから再構成をしていく時期であると思っている。体系というようなきれいな整備でなくていいのでいろんなエピソードを集めながら、再構築していくということをやってもいいのではないかと。

<委員>：コロナの影響は全国民に及んだ。社会福祉協議会自体も相当翻弄された体験を持ったのだろうなと感じた。特に生活福祉資金の貸付とか生活困窮の問題とか、今までにない状況にもう少し触れてもいい。コロナも収束したわけではない。職場でも毎週一人ずつ出ている。網羅的に計画を作ると大体未消化で終わることもあるので。第6次計画で期待したいのは取り組み2のアウトリーチ。ニーズを自覚できない方、外に向かって出ていけない方、解決に向けて自分から動けない人へのアウトリーチは重要だが、とても難しいのでどうやって行くのか期待をしつつ、慎重に考えてほしいと思った。社会福祉法人等のネットは社協が引っ張ってくれているが国に言われてやっている側面もあるため、独自性が出てくれてもいいのではと思う。多くの法人が興味を持って参加しやすい中身を検討してもらえればと思う。

<委員>：コロナが明けて一年が経つ。前に戻ってきている感じがする。人が出にくいことに慣れてしまっていて社会的つながりがなくなっている。民生児童委員協議会でも取り上げられていた再犯防止推進計画がわからない。どこにそういうものがあるかわからないので具体的に上げてほしい。手につくところからやれば良いと思っている。

<委員>：東社協では62の区市町村社協に顕在化した地域課題を毎年度聞いている。課題の一つとして

多く感じていたのが、感染の時期が終われば取り戻せるものと取り戻せないものがあることを感じていて、この間に欠けたものがあり、失った人は失ったまま取り残されている。大学生に何やりたかって聞いたら修学旅行をやり直したい。取り戻せたものとそうでなかったものが各分野であるのだと感じている。もう一つ上がってきたのが、この人たちに課題があると思っていなかった人たちが表出してきた。その人たちとの関わりの中で背景の課題にアプローチできない。支援と相談をどのようにセットにするか苦しい取り組みを続けてきたと思う。こんなにも相談が苦手な人が多い中で、もともと届かないと諦めていることに対するアプローチが必要。一方でプラスだったことは各地域の地域福祉計画のアンケートを見ていると、若い世代の人が地域に目を向けていて、地域に目を向けている事業所の評価も高まっている。若者たちは地域でできることをやってみたくて出てくるのでそこをほっとはいけないと思っていたら、早速、若い人を集めた団体の交流を練馬でもやっていた。板橋区でも高齢者がワクチンの予約ができないと言ったら多くの若者が手を貸してくれた。第3章にこれぐらい書き込んだ上で体系図も説明できる。つながるといふことの難しさ大切さに気付かされる中で柱1が重要になっている。取り組み項目(2)のアウトリーチしつつ認めるというところに行く必要があると思っているのと、柱1の取り組み(3)が認めるに入りにくいと思っている。柱3の参加する、活躍するについてはコロナ禍を受けて働くことができる、働くことができないというレベルでない、地域との関わりについてこの体系図を概要版で説明できるようになる。他の委員からの宿題もある程度できるのかなと思う。

<委員>：第1次計画と第6次計画を比べた時にあまり変わらない。社会の実態は変わらない。世の中の課題は延々と繰り返す、第1次計画が解決したわけではないから、同じことを重複してやることは仕方がない。計画を立てて一歩でも前進できれば努力は努力として評価される。

<委員>：社会福祉法人等ネットの感想と意見を言いたい。法人と言っても色々な分野がある。平成27年度はただでさえ忙しいのになぜこういうことをやらなければならないのかという意見もあった。保育園だから子どものことだけをやっていけばいいわけではない。高齢分野の法人だから高齢者だけを見ればいいわけではなく、地域の課題として取り組んでいることだから、複数の法人がそれぞれつながって、課題に取り組んでいくことに法人等ネットの意義がある。第6次地域福祉活動計画の案の中の取り組み項目(10)に「近隣学校とのつながりを活かした福祉教育の実施」とあるが光が丘地区の法人等ネットで光が丘第8小学校の6年生、5年生を対象に福祉教育を実施した。各法人のそれぞれの想いや何故福祉の仕事を選んだかを話した。今までは一つの法人が行っていて、例えば、障害分野の法人が行うと障害分野に限定されると思った。でも今回は保育も高齢もあわせることですごく意義のある講座となった。取り組み項目(9)の福祉作業所での就労体験という言い方だと狭い。保育園や幼稚園など多様な施設の中で就労体験をもっと広げていいのではないかと思った。作業所ではなく施設という表記にしてはどうか。社会福祉法人等なので地域にはNPO法人や企業もあるので第6次地域福祉活動計画の中でそれらを入れて、次のステップに行ってもいいのではと思った。柱1の取り組み項目(3)で就労定着支援の充実とあるが、障害者雇用率2.3→2.5→2.7が上がる。障害のある方が社会に参加する機会が増えるいい面もあるが、うちの法人の課題として、会社が合わず出戻りする人が増えた。練馬区内で就労継続支援B型は空きが出ているが、生活介護はどこもいっぱい。今後一般企業から就労継続支援B型に移る人も増えると思う。そういったことも踏まえ就労定着支援の充実に関して手厚い文章を入れてほしい。

<職員>：区でも地域福祉計画を作っていく側として気づかされることもあった。コロナを経て新しい時代になってそこには新しい課題があるのではないかという意見を聞いてコロナの視点を持つことが必要だと感じた。計画の柱を見てネリーズという言葉が出てこないと思ったら重点的な取り組みとしてネリーズと社会福祉法人等ネット、地域福祉コーディネーターと協働した地域づくりということで個別な項目に入

れるのではなく全体に関わることなので重点的な取り組みに置くということはあるほどなと思った。社協らしい活動の計画案を作れたらいいと思った。

<職員>：コロナ禍がどうだったのかということの評価のところでは触れてはいるものの、第6次計画骨子案の中であまりふれられていないと感じた。コロナ禍で翻弄された。出会えない人たちに出会えたという点について非常に貴重な経験だったと思っている。コロナが広まって生活に困った人達がたくさんいて、雇用も安定しておらず、離職を繰り返していく方々も多かったです。住居確保給付金も特例貸付けも多くの人の対応をしなければならぬ中で相談を深めることができない時期もあった。ジレンマだったと思っている。少しずつ相談対応に時間をとれるようになってくる中で、生活の課題や世帯の状況を聞き取れるようになり深めることで相談者の背景を聞くことができ、必要な支援やサービスにつなげることができてきた。また、外国籍の方が多く相談にいらした。やれることやれないことを私たちも学んだ。継続的につながっている人の中には夫婦間、家庭の問題や子どもとの問題、在留ビザの問題を抱えており、私たちが何をできるのか考えることで学びになった。弁護士にも相談しながらやれることを一緒に考えてきた。制度の狭間にいる方々がこれだけいるが、使えるサービスや仕組みがない中でその方に合った対応として何ができるのかということを探した期間であった。自身で申請書を書けない、内容を理解できない人へのサポートをどうすればいいか、それが当たり前のように本人たちが理解して申請するものとなっているので、本人たちが分かるものになっていないと権利を侵害していると思った。今後、相談に来られない人たちにどう出会っていくのかについてはアウトリーチの機能が大事になってくる。関係機関との連携や地域住民、ネリーズとつながりながら困りごとのある人をキャッチしていくために出ていく必要があると思う。社会福祉法人等ネットとの連携については、色々な方の社会参加、社会とつながることに自信がない方が一歩踏み出すために、福祉の専門職のいる社会福祉法人との連携は必要だと思っている。地域の困っている人の声を聴いていきたいということで、光が丘地区では地区祭に参加してお困りごと相談を行った。社会福祉法人と連携しながら外に出て声を拾っていくことが大事。そういう意味ではネリーズ、社会福祉法人等ネット、地域福祉コーディネーターと協働した地域づくりの中で社協職員がつけたりキャッチしたり仕掛けをしないと機能しない。私たちは意識して取り組んでいくことが大切と感じている。

<職員>：コロナ禍で自分に起こったことを思い出しながら考えていた。振り返ると理不尽であったり残酷なことがあふれている社会に生きていることを突き付けられた時期だった。セーフティーネットが機能しない人たちがこれほどまでに多く同じ地域に暮らしていたことに気づかされた。今も終わったわけではない。自分自身も偏見があったのではないかとも思う。今も福祉の専門職や公的な窓口の職員とやり取りしていても感じることもある。例えば、外国籍の人に対してなぜ日本に居続けたいのか、なぜ国に帰らないのかというやり取りが生まれてくる。地域の生活課題について一人の方の肉薄した人生を地域の方に伝えていくことが重要だと思う。一方で、若い方の関心が地域に向いているという話もあった。社会に対して関心を持つ方が増えているので、一人ひとりが社協職員として地域福祉コーディネーターの意識をもってつなぎ合わせるということをやっていききたいと思った。

<委員>：計画に柱2の取り組み項目(4)で災害ボランティアセンターの立ち上げ訓練や関係者連絡会で避難行動要支援者の名簿を活用する予定はあるか。地域でやるならネリーズがやるのか。

<職員>：現在、避難行動要支援者名簿の現状調査している。外部提供の同意を取っている。同意していただいたら民生委員、地域包括支援センター、警察、消防に情報提供することになっている。

<職員>：柱3のキーワードについて「活躍する」だとちょっとハードルが高いのか、参加するだけでい

いのか、参加したら活躍するという直線的な流れで考えている。

<委員>：「経験する」というキーワードがありかなと思った。

<委員>：避難行動要支援者名簿の件、本当に災害が起きたら民生委員ができるか不安。避難拠点にも帳簿ある。練馬区に要望を出しているが具体策が出ない。

<委員長>：総合的な課題への対応について子どもについての言及がないが、委員に子どもの貧困について話していただきたい。

<職員>子どもの不登校の活動の流れで地域の子ども食堂をはじめた。全国で把握されている子ども食堂は9000件になった。2022年時点では7000件だったのでものすごく増えた。10年くらいやっている中で子ども食堂が地域の居場所になるのではないかと考えている。現場でやれることは問題解決になっていない、根本にはなぜその人がそういう状況になったのかということがあるが、私の手が届かない。社会が分断されていて、関わらなくても生きていける社会があり、コロナ禍がそういった社会を促進させてしまった。無関心社会は自分がその立場になったときにはしごを外されてしまう。関心のない人たちが困ったときに地域のコミュニティの必要性に気づく。私ができるのはその時にいつでも開けておく場所でありたいと思っている。コロナ禍でなぜ開けておけたかということ感染症は一つの契機だった。必要としている人たちのために自分は何ができるのか考えたときに起きた事象は関係なく、自分は何をするのかということを考えればやることはある。義務教育機関から家にいてくださいと言われて困ってしまった親御さんもいた。社会のインフラがあって依存したりされたりしながらやっているということ意識しないと何かあったときに対応できない。それぞれが「一人の不幸も見逃さない」理念を持っていることで成り立つ。計画を成功させるためにやるだけではなくて、一人ひとりが関わっている人生や考えを反映させていく部分がないと地域の人姿がない計画になってしまう。子どもたちの貧困は大人たちの事象や問題がすべて詰め込まれている状態。子どもの貧困は実はなくて大人の経済的な問題や精神的な問題の影響がおりてきただけの状況。家族だけで子どもを見る必要はないと考えていて、いろんな人たちがつながれる関係性のある場所をキープする。一番大事なのはそういった精神性を忘れないで生きていくことが計画を形にしていくために必要。

<委員長>是非、計画の中にも委員の言っていた視点を入れてほしい。

<委員>2章と3章でコロナ禍から見えてきた地域課題や第5次地域福祉活動計画を振り返ることすべて網羅されていると思う。前進して進めていただければと思う。

5. まとめ（委員長・副委員長）

<副委員長>：コロナによって今まで出会えない人に出会えたけれどそのあとが分かっていない。根本の問題が解決しない中にある。社会的孤立は以前からあった問題なので、社協も重視しようとしてきた。OECDの中で日本は番社会的孤立が高く、また貧困率も高いことは見逃せない。一人ひとりがばらばらでギリギリのところできている。分断されているので関心のない人は全く関心がない。それをどう結びつけていくかつなげていくかが第6次地域福祉活動計画の大きな問題になっていくと改めて思った。

6. その他（職員）

次回の日程について

日時：令和6年6月24日（月）18：30～

場所：区役所地下多目的ホール

資料4 計画策定のスケジュールについて

目次、内容を箇条書きし、文章化していきたい。来年度は計画を策定する年になっているので策定・推進評価委員会を6月、9月、11月、2月の計4回行いたい。11月の委員会では計画の素案2稿目を出し、説明会の準備をしていきたい。11月～12月にかけて、説明会も予定している。説明会には可能な限り委員さんも参加していただきたい。12月にパブリックコメントをまとめ、2月の委員会で最終の決定をする。3月の理事会評議員会で説明する。

<委員>：女性支援法という新しい法律ができる。女性の自立と困難な問題を抱えた女性を支援していく法律。地方自治体も共同する。練馬区は男女共同参画課が中心になって動いていく。これまでは、困難を抱えた女性が役所に来ても話をどこにしていいいかわからない状況があった。社協の中で支援していくことはできないかなと考えている。4月から注目してもらえると良い。

<職員>：委員の任期が3月までなので次回次年度の委嘱状をお渡しする。来年度新たに委員を3名迎えたい。

以 上